

# 情報誌あれこれ

## 磐田市 チエック

今、私たちの周りには、おびただしい情報があふれています。多くの情報の中から自分にとって必要な情報を得るのは難しいのですが、一つの手段として情報誌があります。

女性や婦人団体の連携を支援する目的で創刊された本誌「ねつとわあく」もその情報誌の一つですが、女性のライフスタイルの多様化などにより、女性関係の情報誌も多種・多様化しています。

今、県下では「ねつとわあく」をはじめ、多数の女性関係情報誌が発行されています。今回はその中から、市町村が主体となつて発行されている情報誌を紹介いたします。



磐田市教育委員会・社会教育課では、情報誌「チエック」を発行しています。昭和六十年から、磐田婦人情報誌「とんぼのめ」を年二回発行してきましたが、対象を一般にまで広げようと、改称されて作られたものです。平成三年六月に第一号が発刊されました。B4判一枚の裏表を使った形式で、月一回、千部を公民館や福祉センター、いわた女性性の会などに配布しています。地域活動の女性グループなど十団体で構成されている「いわた女性の会」では、代表者が月一回会合を開くことになっており、その結果も織り込むように配慮されています。

名称の「チエック」とは、いろいろな物事をチエックする意味と、縦・横の糸を交差して作る格子柄のイメージから、様々な意見を取り入れ、幅広く意見を紹介しようという名付けたそうです。

編集員は一般公募の方を含めて五人です。三十代、四十代の女性で、職業は会社員、塾の先生、主婦などです。メンバーの中には、「とんぼのめ」当時からの方もおり、その名前を残したいと「グループとんぼのめ」として編集に携わっておられます。月二回、全体会議を行ない、各号ごとに担当二名を決め、取材からレイアウトまで完成させます。紙面が出来上がったときの喜びは、こたえられないそうです。

平成四年度の編集テーマは「生き方を考える」です。生きていく上での大切なことを、五項目選び、環境、教育、経済などを身近な問題として取り上げています。編集にあたっ



上永道恵さん  
鈴木京子さん 小岸順子さん  
野沢栄子さん グループとんぼのめ 千田好乃さん

ては大会ではない「磐田発」であることを大切にしているようですが、磐田市には国際的な企業があり、海外在住の経験のある方も多く、視野の広い国際的な意見が聞ける利点もあるとのことでした。また、図表や写真、カットをふんだんに盛り込み、わかりやすく親しみやすいものになっています。

編集員の皆さんは、編集に携わることになり、「ものごとを客観的に見られるようになった。」「日本語を改めて見直すようになった。」「自分のこれからの生き方を考えるようになった。」などと、自分自身の勉強にもなると大変やりがいを感じているそうです。

今後とも、「磐田発」の身近な、しかし、大切な情報を、多くの人たちのために送り続けてほしいと思います。

漆畑さんは造船学を学ぶため一九六六年に来日し、大学院修士課程を卒業しましたが、ベトナム戦争で七五年にサイゴンが陥落したため帰国できず、その後静岡市出身の漆畑登代子さんと結婚し、七七年に帰化しました。造船不況のため保険会社に就職し、十一年間勤務しましたが、得意の腕を活かして母国の味を伝えたいとベトナム料理店を開き、現在に至っています。御家族は奥様と潤君（十六歳）・玲雄君（十歳）の四人家族です。

＜夫婦について＞

ベトナムでは結婚しても女性は働くのが一般的です。女性が子供を養えるくらい経済的に自立しないと夫に对等でないという考えのもとで、母も仕事を持っていましたし、姉にも技術を持つようになら育っていました。私自身家事をすることに抵抗がなく、妻が外出のときは食事を作ります。片付けもして、家族一緒に過ごす時間を長くもつようにしています。

＜子育てについて＞

ベトナムでは先生や父親の権威が強く、親に対する言葉遣いなどしつけには厳しいものがあります。

た。今の日本の親はしつけが甘く、片や子供たちは勉強に追われ、遊びの中から何かをつかむ大切さを忘れていきます。自分の個性を見つめる余裕がないのではないのでしょうか。アルバイトなどいろいろな社会経験をして、汗を流して働く

## 日本に帰化して

ファム グエン ホワン  
漆畑 雄樹 (范阮雄) さん



南ベトナム・サイゴン出身

1966年来日、77年帰化。

現在、静岡市でベトナム料理店経営。

こと、お金を得ることの難しさなどを体験することも大切だと思えます。豊かなときはぜいたくをしても良いけれど、食しくなると耐えられるような強い精神を持った人間になってほしいと思います。

＜国際交流について＞

今では外国人も随分増えたのですが、外国人に対して、まだかなりの距離をもって接しているのではないのでしょうか。どこの国の人だとか、どんな家の人だとか考えるとつき合いは難しいものです。つき合いに目的や



利害関係などを入れず、オープンな気持ちでつき合い、どんな人間かを知っていくことが大切なのだと思います。日本の狭い住宅事情から自宅に呼べないことも分かりますが、日本人は客を招くというこだわりがあるのではないのでしょうか。友達

だったらありのままの生活を知ってもらうことにより、より親しくなれるのだと思います。また、多くの友人を招くことで、知らない者同志が友達になれます。国際交流パーティをやっても、その場で終わってしまうのではなく、その出会いを活かすようなつき合いを続けていったらどうでしょうか。

外国人労働者についても、彼らの働く姿勢は日本の若者にも良い刺激になると思います。外国人が増えている現状から、行政や民間での積極的な対応が必要です。外国に来て孤独なので、カウセンセリングなどが充実したらと思います。

お話から、国際情勢に翻弄され祖国を失いながらも、生き方に対する強さ、柔軟さが感じられました。「若いころの夢が戦争で実現せず、人生に対する考え方が変わりました。人間どこに住んでも、国籍が変わっても、人間が変わるわけではありません。人生っておもしろい。やりたいことがまだまだあります。」いずれは御家族にベトナムを見せたり、アメリカ、フランス、オランダに渡っているベトナム人の御兄弟にも会わせたい、と話される漆畑さんです。

# 本だな…読んでみました

## 「従軍慰安婦」

西野留美子著  
明石書店 一、七〇〇円



## 「従軍慰安婦・内鮮結婚」

鈴木裕子著  
未来社 一、八五四円



戦後四十七年を経て浮上してきた「従軍慰安婦問題」。

「人間であること」を奪われるのが戦争だという一殺りくと暴行、強奪、強姦等々。そして、兵士たちの性病による戦力低下を防ぐために軍の管理下に置かれ、性のほけ口とされ、軍隊の移動とともに軍需物資として戦地へ輸送された従軍慰安婦たち。彼女たちが生き地獄から脱け出るには、「死」しかなかった。彼女たちは、強制的に、あるいは目的を告げられずに連行され、中には十二、三歳の少女もいたという。慰安婦たちの八

割が朝鮮人女性であり、日本人女性や日本軍進攻地の女性をも含んでいた。

性の問題ゆえに、今まで被害者、加害者の口は重く閉ざされていたのだろう。戦争中のことを知ることは辛く苦しい。しかし、「戦争だったから」という理由ですべてを葬ってよいわけがない。加害者が日本人であり、そして、彼女たちの心の痛み、体の痛みがわかる同じ女性であるがゆえに、なおさら知らなければならぬ問題なのだと思う。

日本の国際化が言われて久しい。真の国際社会の一員となるには、日本が過去に行った事実を客観的に認識することが前提であり、その反省を活かしていくことが、過去から学びとることができる人間の英知であると思う。ここであらためて西ドイツのワイツゼッカー大統領の言葉（一九八五年五月、ナチドイツ降伏四十周年記念演説）を思い起こしてほしい。

「過去に目を閉ざすものは、結果として現在にも盲目となる。…老人であろうと若者であろうと、過去をありのままに受けとめ、その結果に責任を負わねばならない。」主権者たる私たちが銘記すべき言葉であると思う。

(Y)

## 「ママでなきや、だめ!」

黒田あゆみ著  
ワッキング・ウーマンの妊娠、本来ならば喜びに包まれる最も幸福な出来事なのに、大きな悩みとなった。決断後の四苦八苦は並ではなく、真に迫る。知らずと自分に置き換え、思わず力んでしまう。仕事と育児、失敗談が参考になる。マガジンハウス 一、二〇〇円



## 「試された女たち」

澤地久枝著  
美貌と才気に恵まれながら薄幸な人生を送った六人の女性が紹介されている。特に秀れた俳句を作りながら、精神的に病んでいく杉田久女の話は悲しい。女性の自立が許されなかった時代ゆえの悲劇とも言える。



## 「結婚と家族」新しい関係に向けて

福島端穂著  
「こうあるべき」に押されがちな「本当にこれで良いのか、こうありたい。―内なる声」。夫婦別姓問題をはじめ、民法法が本当に男女平等や個人尊重に即したものであるかを考えさせる。生活に最も身近な民法に目を向けなければと思う一冊。岩波新書 五五〇円



## 「いっぱしの女」

氷室冴子著  
三十五年生きた、いっぱしの女の 에스プリとユーモアに富んだ中辛エッセイ。リアルタイムの雑感、作者のこだわりは小気味がいい。いつまでも純な心を忘れない自分自身への問いかけは、読者を納得させるものがある。筑摩書房 一、二〇〇円



## 「あかるく拒食ゲンキに過食」

伊藤比呂美・斎藤学著  
世の中、やせたいと思う人は案外多いはず。しかし、食生活のコントロールには意外な落とし穴があるので。摂食障害の少女たちとの会話からその背景をみつめ、「生きる」ことをもう一度考えさせてくれる一冊。



平凡社 一、三〇〇円

# シフォン

## 北大路魯山人と富本憲吉

待ちに待った行事だったのに無情の雨。うなだれて登園した我が子とは裏腹に、シトシト降る雨で、久し振りにゆったりした時間を持って、御機嫌な私です。

青空がのぞくと、いてもたってもいられなくなって、バタバタ洗濯や草取りにとあくせく働くのが日課になってしまっている私には、暗く冷たい雨が“ダイヤモンド”なのです。

先日、北大路魯山人の陶芸を鑑賞する機会

(E.T)

## 修学旅行

中学校の修学旅行。思い出すに強行スケジュールだけが心に残っている。参拝するたびに笛が鳴り、「集合!」「点呼!」のくり返しだった。見学にしても時間に追われ、どこで何を観たかあまり覚えていない。もっとも、30年近く経っているから記憶が薄らいだということもあるけれど…。

当世の修学旅行は昔のそれと比べると自由で個性的。息子の学校の場合も、2日目に、5~6人づつのグループの自由行動がある。

旅行前、前年を参考に見学先を自分たちで決め、限られた時間内にバスで観光するものだ。ただし、あまり、見学先を多くすると時間内に回れない。時刻表を片手に時間配分も難しいところ。

知らない土地で不安一杯の子供たちが目に浮かぶ。夜も計画どおり見学できた自慢話とできなかった失敗談でわいたことだろう。

ともあれ、無事御帰還。バスの発着所は迎えの車があふれてる。家に着くなり疲れもみせず、大いばりでお土産をひろげている。安心と一緒に3日分の洗濯物ももらって、私はどっと疲れがでてしまった。

あ~! 時代は変わる。

(Y.F)

に恵まれました。頑固で一筋縄ではいかないと言われる人柄からは、想像もつかないほど繊細で温かく、そして素朴な、それでいて優美な器に魅せられて、しばし、幽玄の世界をさ迷っているようでした。しかも、陶器だけでなく、絵や書にまで手を伸ばした魯山人の偉大さを実感し、頭の下がる思いでした。

雨が明るく感じられたある日、「富本憲吉展」へ出掛けました。“竹林月夜”の模様が施された芸術品を観ていると、不思議に心が落ちついてきます。「ゆとりを持って、長い目で焦らずに、一歩ずつ進んで行こう。」と、美術館を出た私は思っていました。

## 「語らい」—古き良きころの友

言い出しっぺのHは私たちのパイプ役。楽しかった高校時代の新聞部のメンバーをホットラインで結び、時折、近況を知らせてくれる。「今度、集まろうね。」と、数年前前から言っていた。思えば、卒業以来20余年、同学年の部員だけでは集まっていない。

その日、懐かしい顔ぶれの一部が我が家に。ハッスルガールだったKの笑顔はあのころと変わらない元気印。冷静な物腰のMは、少女のときから大人びた考えをされていてムードがある。H親子は顔立ちがあまりにもよく似ているので皆の笑いを誘う。言葉豊富に話すかわい男児だ。午後の仕事を早退して途中から加わった近くに住むMの「ドキドキしながら来たの。」と言う声は、かわいらしく10代のころのまま。これからの可能性を信じている私は“夢見る、夢子”というところ。

持ち寄った昼食の間にも話のキャッチボールは続く。——タイムスリップして新聞部の部室へ。隣室からの音楽部の合唱の声、部室からの眺め。美しき先輩や先生の横顔と校正作業…。 “時の経つのも忘れる”ひととき。心の引き出しの中身が、またひとつ増えた。

(K.S)

## シフォン

経緯なてよことともに1本の生糸きいとに強撚きょうねんを施した糸で織られたきわめて薄地の絹織物のシフォン。女性としての、しなやかさと秘めたる強さを経緯に例えて、この1ページを織り上げました。



# 平成4年度編集員紹介



女性、男性、国籍にかかわらず人間として魅力ある人々に出会い、それを皆さんへ発信するとともに、自分の生き方や子育ての栄養素にしたいと思います。

静岡市 山田 綾子

意欲のあるときが学びどき、つくりどき。女性と社会の構造を考え、「さあ！」という思いで編集にトライ。そして、ステップ・アップ。

清水町 進藤賀代子

入学入園の我が家の子供たち。そして母親も「再社会人1年生」です。多くの不安とたくさんの嬉しさの中で、これから頑張って静岡へ通います。

浜松市 寺田 悦子

何かやりたいと思っていた私に、編集員の仕事はまさに天の恵みです。1年間、「HOW TO 編集」に頑張ります。

大井川町 荒木 弘子

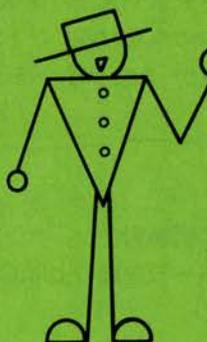
箱入りおばさんが、家族の励ましと好奇心で、静岡通いが実現しました。子育てで培った忍耐と体力を後ろ盾に、一步踏み出します。

富士市 古屋 洋子

「女性のための情報誌」から「女と男の広場」へ

職場や家庭や地域で、男性と女性がイコールパートナーとして、共につくる社会「男女共同参画型社会」を実現するために、女性だけでなく男性とともに婦人問題や男女の生き方を考えてみたいと思います。

女と男の新しい“ねつとわあく”を目指して…。ぜひ、男性にも一読を!



女と男の広場  
ねつとわあく No.21

平成4年11月

編集・発行 静岡県環境・文化部 婦人課

〒420 静岡市追手町9番6号

☎ <054> 221-3122

表紙デザイン

県浜松工業技術センター 小杉 思主 世

